岡山の医師らソマリア難民救援

AMDAなど民間4団体計画

日本などアジア十三カ国の医師らでつくる「アジア医師連絡協議会」（AMDA＝本部岡山市）は、飢餓に苦しむアフリカ東部の国・ソマリアの難民救援に二十三日出発する。他の民間海外援助団体（NGO＝非政府組織）と協力。医師を現地に派遣し、医療活動などを始める。

1年間、診療活動

第1陣23日に

計画では、AMDAとアフリカ教育基金の会（北九州市）、立正佼成会平和基金（東京）などNGO四団体で「ソマリア難民救援プロジェクトチーム」を結成。難民が流入しているケニア東北部のマンデーラ県、ジブチ南部のアリサビエ、それにソマリア国内にも医師、看護婦、教師らを派遣、援助活動を展開する。期間は約一年の予定。

ケニアとジブチには診療所を開設。ソマリアでは巡回診療を行い、学校を建設。そのほか井戸の掘削や食料、衣類の配布などをする。

他に数団体が参加を検討しており、派遣人数は約百五十人規模になる見通し。

AMDAは主に医療面を担当。二十三日、津曲兼司医師（三六）＝岡山市佐山＝らが出発する。

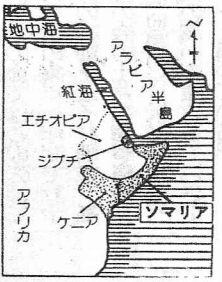
日本人医師二人を派遣するのを皮切りに、海外支部からも順次、現地入りする。

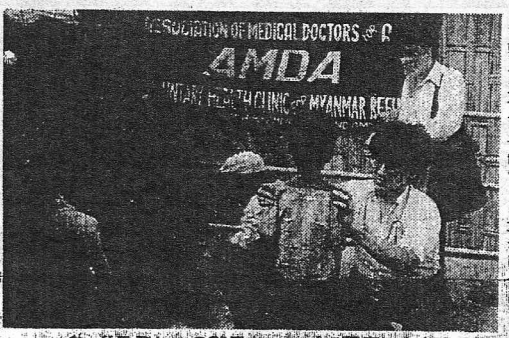
ソマリアは内戦と干ばつで飢餓が広がり、治安状態が悪化。国連安保理決議に基づき、多国籍軍が昨年十二月から人道援助目的で軍事介入している。

外務省によると、ソマリアから近隣のケニアやジブチ、エチオピアなどの諸国に流出している難民は約百万人。ソマリア国内の中・南部では、毎日数百―数千人が飢えや病気のため死亡しているという。

日本はこれまでソマリア難民のため、二千七百万ドルの資金を援助。しかし人的貢献の見通しは、今のところ立っていないという。

同プロジェクト代表の菅波茂医師（四六）＝AMDA代表、岡山市楢津＝は「ソマリア難民は大人も子供も、マラリアや下痢、栄養失調などに直面している。緊急援助が必要だ。少しでも多くの難民に手を差し伸べることができれば」と意欲を見せている。





バングラデシュの難民キャンプで医療にあたるAMDA医師団（右から2人目が今回派遣される津曲医師）＝昨年4月